
走り屋列伝！～スピードの向こうへ～

カさん@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走り屋列伝！〜スピードの向こうへ〜

【Nコード】

N27130

【作者名】

力さん@

【あらすじ】

ある手紙から一変した浩太の人生。

天性の感覚であらゆる敵をなぎ倒す公道ストーリー

最速伝説は今、始まる…

プロローグ

2010年 3月18日

親父が死んだ。突然のことだった。犯人はまだ知らない。

親父が流していたときに煽られてバトルを申し入れたらしい。

仲間が親父を見つけたのは、事故が発生してから10分後だったという。

どこで事故ったのか、誰にやられたのかはわからないうえに、

暗い夜道…つまり峠だったからぐしゃぐしゃになった34Rを見

つけたのは10分後で、既に息絶えていた。

それから2年後・・・

親父の書斎を片付けているとき、封筒が落ちた。

俺への手紙だった。

“ 浩太へ

この手紙を読んでいるときには、

俺は死んでいるだろう。

俺からのお願いだ・・・

この鍵は俺のFDの鍵とガレージの鍵だ。

このFDを使って、峠を制覇してほしい。

頼む…

親父より”

これが俺と峠の出逢いだった。

プロローグ（後書き）

ここには大体、次回の予告、感想等を入れていききたいなああとW
次回は登場人物（主要）の紹介です。

登場人物紹介

登場人物

愛車

身長

通称

体重

職業

平岡 浩太	マツダ	RX-7	FD3S	
神の子・ゴッドハンド				17
2cm	58kg	hiraoka	モーターチーフ	
メカニック				

浩	日産	スカイラインGT-R	BNR-34	
伝説の走り屋・ゴッドドライブ				1

80cm 65kg

美紗	スバル	インプレッサ	GF-GC8	22B
-STI	最速のグリップママ			

164cm

49kg

GS店員

工藤 啓一	ホンダ	シビックTYPE-R	EK9	
啓太の血を継ぐエリート・クレバードライブ				18

4cm

71kg

啓二

インテグラTYPE-R DC2

Mr.サーキット

183cm

69kg

hiraoka モータ

ーサブリーダー

啓太

NSX-R

NA2

首都高の神

176cm

75

kg

悠子

1

72cm 52kg

宮川 麻由美 スズキ カプチーノ EA11R
峠の小悪魔

159C

m ヒミツ!

鈴木 周 トヨタ トレノ AE86

悪魔の整備士・最速の峠チューナー 168C

m 60kg

福田 一史 マツダ RX-7 FC3S

峠界の神・地獄の突っ込み 173C

m 57kg

登場人物紹介（後書き）

わかりにくくなっていますが、ご愛嬌でW
次回から本編ですよ

第一話 出逢い(前書き)

この小説にでてくる峠は実在しません。

5連へアピンとかできますが、某秋 峠ではないのでw w

基本、どついう峠かはこの自身の想像にw w

では、スタートです！

第一話 出逢い

浩太「じゃあ、行つて来る。」

彼の名前は、平岡浩太。今ではS山最速の走り屋だ。

浩太は、亡き父の仇を討つために走っている。

愛車はFD。父の形見だ。S山に来るよそ者は、

ほとんど浩太を狙っている。

そんなある日、FCがS山にきた。

??「平岡はどこだ？出て来い！」

浩太「平岡は俺だけど、何か用？」

??「俺とバトルしろ！」

浩太「いいけど、後悔するなよ!？」

??「後悔する気は全くないんでな！」

浩太「名前は？」

福田「福田一史。」

浩太「じゃあ始めようか。啓一、カウント頼む。」

S山山頂は、ぴりぴりとした緊張感に溢れている。

啓一「カウント行くぞー！」

「5！」

「4！」

「3！」

「2！」

「1！」

「GO!!！」

啓一が手を振り下ろした瞬間、スキルとロータリーエンジン音が、S山に鳴り響いた。

第一コーナーは、二人ともグリップで抜けていった。立ち上がりは浩太のFDが後をとる。

すかさず浩太は4速から3速、そして2速に落とす。

福田も2速に落とした。

ドリフトで一気にヘアピンをパス。

啓一「見たか!？」

啓二「ああ。80kmぐらい出てたな。」

啓一「こりゃあ浩ちゃんマジだな。」

啓二「こんな走りは兄貴とのバトル以来だな。」

低速セクションに猛スピードでつっこむ。

浩太「タイヤもつかない?でも、ここは我慢我慢。」

FC、そしてFDが光線の如く消えていく。

一瞬ブレーキランプが光ったと思えば、すぐさまアクセルを開ける音が鳴り響く。

フルブレーキングは当たり前だが、ギリギリのところまで駆け引きが行われている。

福田「チツ!ちぎれねえ。さすが、といったところかな。」

福田は一コーナーから98%くらいで攻めているのに対し、浩太は鼻唄交じりでコーナーに侵入していく。

浩太「あと1cm」

浩太は天性の車幅感覚を持っている。慣れた峠ならば5mm単位で幅寄せができる。

もちろん、その車幅感覚は峠のバトルでも非常に重要になるとは言うまでもない。

浩太「ここで全開!」

ホイールスピンを一切することなく、パワーをロスしているわけでもない。

ギリギリのところをついているのだ。

浩太「立ち上がりで勝ってるね。突っ込みは言うまでもない。仕掛けるか!」

短い右を抜けたら左の長いヘアピンが待っている。浩太は短い右でアウトに振った。

浩太「被せるよ!」

しかし、福田もバカじゃない。鼻先を浩太より出してフェイントに持っていく！

福田「ここで仕掛けることはわかっていたんだよ！」

浩太「予想通りだね」

意味深長な発言をしたかと思っただらまた次のコーナーが待っている。

その後、バトルは持ちつ持たれつの競り合いだったが、目立った動きはなかった。

しかし、動きがなかったFCvsFDのバトルは5連ヘアピンで突然動いた。FCがブレーキランプを灯し曲がろうとした瞬間に、

福田「あ」

一瞬の出来事だった。

プシューシューバシユバダン・・・ドツカーン！！！！

エンジンが焼きついて、スピンして事故つたらしい。フロントバンパーがとくに逝っている。

福田「やっちまった…」

浩太「大丈夫か？」

福田「ああ、俺は。でも…」

浩太「エンジンは？サスは？」

福田「エンジンがヤバイかもしれない…」

浩太「家に来いよ」

福田「なぜだ？」

浩太「うち、整備工やってんだ。」

福田「OK。お言葉に甘えて。」

hirakomaモーターズ二階商談スペースにて…原因の究明は啓二に任せている

浩太「ところで、何でバトルをしようと思ったんだ？」

福田「俺は、〇山の走り屋で、お前のことは、

1年ぐらい前から知ってたよ」

浩太「ふーん」

福田「ひとつ、頼みがある」

浩太「何？」

福田「俺の日本制覇プロジェクト

に参加してくれないか？」

浩太「ずいぶん唐突だな。誰がいるの？」

福田「今のところ、お前だけだ」

この頼みはあまりにも唐突で、かなり動揺していた。

福田は意味ありげな微笑みを浮かべていたことを、

浩太は直感的に感じたのであった。

1週間後：

浩太「福田出来たぞ！」

福田「サンキュ！結構イジっていただろ。」

浩太「ああ、見た感じ中開けてるね。タービンもトラストだし。どん位出ているの？」

福田「大体380馬力ぐらいかな。サーキット、峠、全てこれ」

そのコトバに浩太はア然とした…

浩太「スツゲエ」

浩太の口からはそのコトバしか出なかった。

福田「どうするの？プロジェクト？」

福田が聞いた。

浩太「ちよつと考えさせて」

このとき、浩太はなんともいえない福田との絆を感じていた。

第一話 出逢い（後書き）

さて、どうでしたか？どんな感想を入れていってくださいませ。
しかし、誹謗中傷は受け付けませヨ^^

第二話 衝突

浩太は悩んでいた。

親父の願いにのっとり、福田と一緒に山を制覇するのか
一人で制覇するのか、ここに残って楽しむか。

このことは母にも言っていないし、親友である啓一、啓二にも
言っていない。

2年前まで、親父の会社だったhiraokaモーターは「地
獄のチューナー」こと

鈴木周が切盛りしている。今は、チューンはほとんど浩太、啓
二がしている。

鈴木がチューン、メンテをするのは、バトルをして、彼が認め
た人だけだ。

それほど、危険なチューンだからそうしているのだろう。

そして、浩太は鈴木を呼び出して、相談した。

浩太「福田っていうやつから、峠日本制覇プロジェクトというのに
誘われているんです。」

どうすればいいですか？」

鈴木「俺はそんなの知らんよ。自分で悩んで、自分で答えを出しな。

ただ、それをするのは勝手だが、仕事はちゃんとやれよ。」

浩太「はあ……」

鈴木「ただ、浩の願いは峠の制覇だろ？」

浩太「そうですね……」

鈴木「親父に反抗しまくったんだから、親孝行してみれば？」

…浩太は昔、有名なヤンキーだった。

どこかに出かければ、必ず怪我をして帰ってくるという

噂が立つほどである。

ただ、頭はそこそこで、授業は決してサボらなかつたという
ちよつと変なヤンキーだった。…

鈴木の話聞いて、やってみようかとは思いつながらもまだ迷つ
ていた。

そのとき、浩太は麻由美の顔を思い出した。

浩太「よし、麻由美ちゃんに聞いてみるか。」

浩太は相棒に火を入れた…

麻由美の家に行こうとした浩太は、偶然カフェで麻由美を見つ
けた。

福田と一緒に居たのが見えた。好奇心でカフェに入っていくと
話し声が聞こえた。

福田「どうだ？参加しないか？」

麻由美「浩クンはどういつているの？」

福田「まだ決めていない。」

プロジェクトのことを話しているようだ。

麻由美「浩クンがやらないなら私もやらない。」

浩クンがやるなら私もやる。」

福田「じゃあ、聞こうぜ、浩太に。」

浩太「気づいてた？」

福田「エンジン音で気づいたよ。」

浩太「うっ…」

麻由美「気づかなかつた〜」

福田「で、どうするんだ？浩太」

浩太「あと二人いれてくれるんだったら」

福田「工藤兄弟か？」

浩太「御名答」

浩太「啓一は見る力がある。相手のうでや弱点とか。

啓二は、腕は俺らにはちよっと及ばないが、

整備、チューンに関してはもう一流だ。」

福田「誘ってみよう。」

浩太「サンキュ。」

その夜：

啓一「5台追走な。俺が前、浩太がその次、麻由美ちゃん、

啓二、そしてあんただ。んで、福田。」

ポイ

啓一はトランシーバーを福田に渡した。

啓一「連走するときは電源を絶対に入れる。対向車が来たりしたときに先頭の奴が言うから。」

福田「わかった。じゃあ、行こうか。」

そして5台は暗闇の中へ消えていった。

トランシーバーから啓一の声が聞こえた。

啓一「対向車線から5台くらい車がきている。

少し落とすぞ。」

「「「了解！」「」」

5台とすれ違った。

すれ違ったとき、殺気を帯びたオーラが浩太には見えた。

山頂：

走り終えたあと、浩太はしゃべった。

浩太「さっきの5人、すげえ速そうだった。」

殺気を帯びたあのオーラ、間違いない、絡んでくるぞ！」

福田「オーラは感じたけど、そんなに危ないのか？」

浩太「やべえ、ヤンキーとしてのオーラも感じ取れた」

浩太「いいか、啓一と麻由美ちゃんは、二人でいて、

啓二、スパナだ。福田は、俺らのクルマを守ってくれ。」

啓一「おう！」

そのとき、太いエンジン音が、また上ってきた。

浩太「きたか…」

降りてきたのは5人組だった。

浩太「何のようだ？」

浩太は、さっきとは違う、太く、強く、静かな口調で問いかけた。

??「文句あんのか!？」

浩太「走るんだったら好きにしろ。通るんだったらさっさと通れ。

ただ、ここでの喧嘩は受けつけねえぞ。」

??「殺す！」

3人はすごい勢いで2人に飛び掛った。

それを簡単に撥ね退ける浩太と啓二。

隙を突いて肘鉄を食らわす。一人は気絶。

スパナを出し、みぞおちにクリーンヒット。

2〜3発殴られたが、啓二が後ろへ回り込みスパナで背中を殴る。

気絶した。

浩太「ふう。」

??「すみません、あいつ、喧嘩っ早くて…」

浩太「本来の用は？」

??「えつと、バトルしてほしいんです。峠の。」

クルマは5台、JZX100系の3兄弟、C33ローレル2台の体制だった。

気絶した3人組がおきた。

小宮山「あのガタイがいいのが佐藤、坊主が田中、ロン毛が中西です。」

あの3人が3兄弟を操っています。

そして、僕が、小宮山、メガネが…」

長居「メガネっていうな！長居悠太だ！」

小宮山「悠太と僕がローレルを使っています。」

佐藤「てめええらそうな口きいてんじゃねえ」

浩太「この山の？1は俺だ。」

佐藤「5対5か。じゃあ、手っ取り早い。さつさとはじめようぜ！

上り2本、下り2本、決着がつかなかったら、往復一本」

浩太「上りは、福田と啓二で行く。下りは、麻由美ちゃんと啓一、

頼む。」

浩太「福田、啓二行って来い！」

啓一「浩太、お前は？」

浩太「四本目に、後からついていく。タイヤを温める」

啓一「わかった。」

山には、静けさと緊張感が張っていて恐怖感をさらにあおっていた。

小宮山「一本目は上り、こっちは中西を出します。」

浩太「わかった、じゃあ、啓二を出す。」

浩太「一本目は100系マーク？、中西だ。啓二、出る！」

啓二「了解」

啓二のインテグラにはハイレスponsなターボを装着している。

ビッグスロットルとあいまって、FFで285馬力を搾り出す。

それに対して中西のマーク？は、旧型のツインターボエンジンを積んでいる。

峠に対応させた仕様。馬力は420ぐらいだろう。

啓二「中西は誰？」

中西「俺だ。」さつき喧嘩で特攻きつたやつだった。

中西「手っ取り早くははじめようぜ！逃げてもいいか？」

啓二「ああ。

ここでは逃げのタイミングで進んでいいつつのがルールな
んで。」

中西「わかった。」

山は一瞬の静寂に包まれたあと、B18C改ターボの音がこだ
ました。

スタート直後の左コーナー、中西は果敢に攻めてくる。

その直後のS字コーナー、タックインを決めてオーバーステア
を出し、そのままFドリ。

カウンターはほとんど、いや、全く出さないのが啓二のスタイ
ルである。

アクセルは、コーナーを抜けてから初めてアクセルをベタ踏み。
一方中西は有り余るパワーを有効にドリフトに持っていく。

弱力カウンターで一系乱れぬラインを描く。

馬鹿でかいクルマを正確に持っていく意外に理論派なスタイル
だ。

ちよつと長いストレートを抜けたら、ゆるい右コーナー。

その次の右ヘアピン。意外に長いコーナーを難なくパス。

このときわずかに中西と啓二の差は開いていた。

中西「くそっ…ブレーキングで負けたか…」

マーク？は軽量化をしても、せいぜい1300kgが限界だ。

中西「ヘアピン抜けたら長いストレート。S字はあっても、完璧に
ついてくる

引き離すのはその後の低速コーナー軍か！」

啓二「大丈夫、ついていく!!!」

マーク？のウエストゲート音が鳴り響く。
その次の左、2台とも難なく抜けていく。

啓一「低速が引き離すチャンスだ。タレてもいい、全開でいけ！」
啓二の無線からげきが飛ぶ。

だがしかし！

3つ目のヘアピンでアウトから進入。そこでサイドバイサイド、
4つ目でマーク？が啓二のインテグラのラインを塞ぐ！！

中西「いつけえ！」叫ぶ中西。

啓二「くるなア！」怒鳴る啓二。

二つの思いとラインが交錯したそのとき、

一気に抜きかかる中西！たった一瞬のことだったが、

啓二と中西にはとても長い時間だったのであろう。

立ち上がりで中西が完全に前に出た…

だが、啓二の目はまだまだ死んでいなかった。

啓二「高速ではイヤでも離される…だが低速なら充分だ！」

中西「これ使うのは嫌いなんだが…」

一瞬マーク？が逆に振った。その後、派手なドリフトへと走り
を変えた！

タイヤはたれるし、遅い走りだが、視界をさえぎるにはちょうどいい走り

なのだろう。

啓二「ナメてんのか！？」

だが、その走り方へと変えたことで、啓二は意外と簡単に追いつけた。

そして運命の低速コーナー軍へと2台は消えていく。

路面のブラックマークと、疾風を残して…

第三話 初！チームバトル！（前書き）

遅くなってしまうって申し訳ありません。

忙しいんですよ、私もww
暇だったら見てくださいな

第三話 初！チームバトル！

浩太は悩んでいた。

親父の願いにのっとり、福田と一緒に山を制覇するのか

一人で制覇するのか、ここに残って楽しむか。

このことは母にも言っていないし、親友である啓一、啓二にも言っていない。

2年前まで、親父の会社だったhiraokaモーターは「地獄のチューナー」こと

鈴木周が切盛りしている。ただ、チューンはほとんど浩太、啓二がしている。

鈴木がチューン、メンテをするのは、バトルをして、彼が認めただけだ。

それほど、すごいチューンだからそうしているのだろう。

そして、浩太は鈴木を呼び出して、相談した。

浩太「福田っていうやつから、峠日本制覇プロジェクト

というのに誘われているんです。どうすればいいですか？」

鈴木「俺はそんなの知らんよ。自分で悩んで、自分で答えを出しな

ただ、それをするのは勝手だが、仕事はちゃんとやれよ。」

浩太「はあ……」

鈴木「ただ、浩の願いは峠の制覇だろ？」

浩太「そうですけど……」

鈴木「親父に反抗しまくったんだから、親孝行してみれば？」

浩太は昔、有名なヤンキーだった。

どこかに出かければ、必ず怪我をして帰ってくるという

噂が立つほどである。

ただ、頭はそこそこで、授業は決してサボらなかつたという

ちょっと変なヤンキーだった。

麻由美に聞こうと思つた浩太であつた。

麻由美の家に行こうとした浩太は、偶然カフェで麻由美を見つけた。

福田と一緒に居たのが見えた。好奇心でカフェに入っていくと話し声が聞こえた。

福田「どうだ？参加しないか？」

麻由美「浩クンはどういつているの？」

福田「まだ決めていない。」

プロジェクトのことを話しているようだ。

麻由美「浩クンがやらないなら私もやらない。」

浩クンがやるなら私もやる。」

福田「じゃあ、聞こうぜ、浩太に。」

浩太「気づいてた？」

福田「エンジン音で気づいたよ。」

浩太「うっ…」

麻由美「気づかなかった」

福田「で、どうするんだ？浩太」

浩太「あと二人いれてくれるんだったら」

福田「工藤兄弟か？」

浩太「御名答」

浩太「啓一は見る力がある。相手のうでや弱点とか。」

啓二は、腕は俺らにはちょっと及ばないが、

整備、チューンに関してはもう一流だ。」

福田「誘ってみよう。」

浩太「サンキュ。」

その夜…

啓一「5台追走な。浩太が前、浩太の後ろに俺、麻由美ちゃん、

啓二「そしてあんただ。」

福田「わかった。じゃあ、行くぞ。」

そして5台は暗闇の中へ消えていった。

トランシーバーから啓一の声が聞こえた。

啓一「対向車線から5台くらい車がきている。

少し落とすぞ。」

「「「了解！」「」」

5台とすれ違った。

すれ違ったとき、殺気を帯びたオーラが浩太には見えた。

山頂…

走り終えたあと、浩太はしゃべった。

浩太「さっきの5人、すげえ速そうだった。

殺気を帯びたあのオーラ、間違いない、絡んでくるぞ！」

福田「オーラは感じたけど、そんなに危ないのか？」

浩太「やべえ、ヤンキーとしてのオーラも感じ取れた」

浩太「いいか、啓一と麻由美ちゃんは、二人でいて、

啓二、スパナだ。福田は、俺らのクルマを守ってくれ。」

啓一「おう！」

そのとき、太いエンジン音が、また上ってきた。

浩太「きたか…」

降りてきたのは5人組だった。

浩太「何のようだ？」

浩太は、さっきとは違う、太く、強く、静かな口調で問いかけた。

??「文句あんのか!？」

浩太「走るんだったら好きにしる。通るんだったらさっさと通れ。

ただ、ここでの喧嘩は受けつけねえぞ。」

??「殺す！」

3人はすごい勢いで2人に飛び掛った。
それを簡単に撥ね退ける浩太と啓二。

隙を突いて肘鉄を食らわす。一人は気絶。

スパナを出し、みぞおちにクリーンヒット。

2〜3発殴られたが、啓二が後ろへ回り込みスパナで背中を殴る。

気絶した。

浩太「ふう。」

??「すみません、あいつ、喧嘩っ早くて…」

浩太「本来の用は？」

??「えっと、バトルしてほしいんです。峠の。」

クルマは5台、JZX100系の3兄弟、C33ローレル2台の体制だった。

気絶した3人組がおきた。

小宮山「あのガタイがいいのが佐藤、坊主が田中、ロン毛が中西です。」

あの3人が3兄弟を操っています。

そして、僕が、小宮山、メガネが…」

長居「メガネっていうな！長居悠太だ！」

小宮山「悠太と僕がローレルを使っています。」

佐藤「てめええらそうな口きいてんじゃねえ」

浩太「この山の？1は俺だ。」

佐藤「5対5か。じゃあ、手っ取り早い。さっさとはじめようぜ！」

上り2本、下り2本、決着がつかなかったら、往復一本」

浩太「上りは、福田と啓二で行く。下りは、麻由美ちゃんと啓一、頼む。」

浩太「福田、啓二行って来い！」

啓一「浩太、お前は？」

浩太「四本目に、後からついていく。タイヤを温める」

啓一「わかった。」

山には、静けさと緊張感が張っていて恐怖感をさらにあおっていた。

小宮山「一本目は上り、こっちは中西を出します。」

浩太「わかった、じゃあ、啓二を出す。」

浩太「一本目は100系マーク？、中西だ。啓二、出る！」

啓二「了解」

啓二のインテグラにはハイレスポンスなターボを装着している。ビッグスロットルとあいまって、FFで285馬力を搾り出す。それに対して中西のマーク？は、旧型のツインターボエンジンを積んでいる。

峠に対応させた仕様。馬力は420ぐらいだろう。

啓二「中西は誰？」

中西「俺だ。」さつき喧嘩で特攻きつたやつだった。

中西「手っ取り早くはじめようぜ！逃げてもいいか？」

啓二「ああ。」

ここでは逃げのタイミングで進んでいいつつのがルールな
んで。」

中西「わかった。」

山は一瞬の静寂に包まれたあと、B18C改ターボの音がこだました。

スタート直後の左コーナー、中西は果敢に攻めてくる。

その直後のS字コーナー、タックインを決めてオーバーステアを出し、そのままFドリ。

カウンターはほとんど、いや、全く出さないのが啓二のスタイ

ルである。

アクセルは、コーナーを抜けてから初めてアクセルをベタ踏み。一方中西は有り余るパワーを有効にドリフトに持っていく。弱カウスターで一系乱れぬラインを描く。

馬鹿でかいクルマを正確に持っていく意外に理論派なスタイルだ。

ちよつと長いストレートを抜けたら、ゆるい右コーナー。

その次の右ヘアピン。意外に長いコーナーを難なくパス。

このときわずかに中西と啓二の差は開いていた。

中西「くそっ…ブレーキングで負けたか…」

マーク？は軽量化をしても、せいぜい1300kgが限界だ。

中西「ヘアピン抜けたら長いストレート。S字はあっても、完璧についてくる」

引き離すのはその後の低速コーナー軍か！」

啓二「大丈夫、ついていく!!」

マーク？のウエストゲート音が鳴り響く。

その次の左、2台とも難なく抜けていく。

啓二「低速が引き離すチャンスだ。タレてもいい、全開でいけ!!」

啓二の無線からげきが飛ぶ。

だがしかし!

3つ目のヘアピンでアウトから進入。そこでサイドバイサイド、

4つ目でマーク？が啓二のインテグラのラインを塞ぐ!!

中西「いつけえ!!」叫ぶ中西。

啓二「くるなア!!」怒鳴る啓二。

二つの思いとラインが交錯したそのとき、

一気に抜きかかる中西! たった一瞬のことだったが、

啓二と中西にはとても長い時間だったのであろう。

立ち上がりで中西が完全に前に出た…

だが、啓二の目はまだまだ死んでいなかった。

啓二「高速ではイヤでも離される…だが低速なら充分だ!!」

中西「これ使うのは嫌いなんだが…」

一瞬マーク？が逆に振った。その後、派手なドリフトへと走りを変えた！

タイヤはたれるし、遅い走りだが、視界をさえぎるにはちょうどいい走り

なのだろう。

啓二「ナメてんのか!？」

だが、その走り方へと変えたことで、啓二は意外と簡単に追いつけた。

そして運命の低速コーナー軍へと2台は消えていく。

路面のブラックマークと、疾風を残して…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2713o/>

走り屋列伝！～スピードの向こうへ～

2011年10月8日02時36分発行